

令和四年度花卷市民芸術祭

第十六回文芸大会作品集

一般の部

花卷市民芸術祭実行委員会

第17回花巻市民芸術祭第16回文芸大会入賞者

と き 令和4年11月12日
ところ 花巻市生涯学園都市会館

<短歌>

作品募集の部 天位 多田 美和子
地位 平沢 裕子
人位 花巻南高等学校 菅原 輝空

小・中学生の部 奨励賞

—小学校— 笹間第一小学校 6年 八重樫 中

—中学校— 西南中学校 2年 石ヶ森薫子
湯口中学校 2年 芦澤 雫
矢沢中学校 2年 佐藤 颯
大迫中学校 2年 伊藤 璃羽
花巻中学校 2年 吉田 愛梨
宮野目中学校 2年 大澤 芽依

<俳句>

作品募集の部 団体賞 東和句会
芸術祭賞 多田 ゆう湖

大畑 善昭 選 特選 松田 萌
佐々木みき子 選 特選 多田 ゆう湖
畠山 濁水 選 特選 多田 ゆう湖
安部 克詠 選 特選 熊谷 敏子

小・中学生の部 奨励賞

—小学校— 湯本小学校 6年 千葉 愛実
湯本小学校 5年 長澤 絆吏
湯本小学校 5年 上田 莉央

—中学校— 湯口中学校 3年 藤井 暁月
花巻中学校 3年 瀬川 昊正
宮野目中学校 3年 梅原 娑羅

<川柳>

作品募集の部

総合	1位	小田 治朗
	2位	小田島花浪
	3位	及川洋一郎

宿題	「出会い」	塩釜アツシ 選	特選	小田島 花浪
宿題	「紙」	及川洋一郎 選	特選	戸来 明子
宿題	「広がる」	宮野 裕 選	特選	小田 治朗
宿題	「自由吟」	あべ 和香 選	特選	及川 洋一郎

小・中学生の部

宿題 「 望み (のぞみ) 」

—小学校—	特選	湯本小学校	6年	永喜多優花
	秀逸	湯本小学校	6年	高橋くるみ
	佳作	笹間第一小学校	3年	平藤 花

宿題 「 望み (のぞみ) 」

—中学校—	特選	西南中学校	1年	小原 暁
	秀逸	西南中学校	1年	菊池 愛依
	佳作	西南中学校	1年	原 唯夏
	佳作	西南中学校	1年	照井 日菜

宿題 「 ポケット 」

—小学校—	特選	湯本小学校	5年	佐々木詩花
	秀逸	笹間第一小学校	1年	平藤 大地
	佳作	湯本小学校	6年	永喜多優花
	佳作	湯本小学校	6年	高橋くるみ
	佳作	湯本小学校	6年	西尾 吏功

宿題 「 ポケット 」

—中学校—	特選	西南中学校	1年	菊池 元慈
	秀逸	西南中学校	1年	高橋 大翔
	佳作	西南中学校	1年	小原 暁
	佳作	西南中学校	1年	照井 依吹
	佳作	西南中学校	1年	照井 日菜

<詩>

作品募集の部	芸術祭賞	「ぼうけんしゃ」	花巻南高等学校		
				齋藤	未琴
	優秀賞	「春」		河津	詠太郎
	奨励賞	「コスモスと母と私」		朝倉	了子
	佳作	「意味のある…」		有原	すみれ
	佳作	「槐の木と幻想」		伊藤	諒子
	佳作	「夕照」		はなぶさ 英	あねこ 阿音子

小・中学生の部

—中学校—

奨励賞	「やせい動物の気持ち」				
		宮野目中学校	1年	高橋	怜華
奨励賞	「糸師」	石鳥谷中学校	1年	佐々木	來花
奨励賞	「ペンキ屋さんと探偵さん」				
		西南中学校	1年	八重樫	愛弓

<随筆>

作品募集の部	芸術祭賞	「哀感の免許返納」		はなぶさ 英	あねこ 阿音子
	優秀賞	「沈丁花の咲くころ」		熊谷	敏子
	奨励賞	「仕舞い夕顔」		藤井	しげ 茂
	佳作	「長男Mに見守られ生きる」		郡司	よし 彬子
	佳作	「ほほえみの団らん」	花巻南高等学校		
				多田	ほのか 帆香
	佳作	「同窓会でフラダンス」		清水	意久子

目次

一、隨筆	一、詩	一、川柳	一、俳句	一、短歌
P 16 }	P 10 }	P 6 }	P 2 }	P 1 }

令和四年度花巻市民芸術祭第十六回文芸六会

「短歌」 作品募集の部 入選作品

千田 正平 選

石黒 和夫 選

天位

芋麻を食むカモシカと目が合いてなお食むさまに可愛さ憎さ

多田美和子

地位

横浜に生まれし友は疎開にてこの町に住み生涯終えむか

平沢 裕子

人位

イヤホンに流れる曲は「少女レイ」歌詞を理解し涙あふれる

花巻南高等学校

菅原 輝空

令和四年度花巻市民芸術祭第十六回文芸大会

「俳句」 作品募集の部 入選作品

芸術祭賞

(東和)

多田ゆう湖

入選

法堂の守護神然と鬼やんま

(あしたば)

蛭沢 秀一

篝火爆ぜぢやぢやもこぢやんと鹿踊

(新樹の会)

千葉 任子

早池峰山裾まで晴るる秋祭

(如月会)

市川 和子

走り出す鈴虫列車子等の声

(新樹の会)

関 園子

自転車のベルでさよなら秋の暮

(如月会)

高橋 和枝

面売りの額に面つけ夜店の灯

(あしたば)

栗城 静子

四歳が正座で聞きし終戦日

(新樹の会)

久保田テイ子

鳥渡る戦渦はいまだ収まらず

(あしたば)

佐々木みき子

月見の茶受けんと正座組みなほす

(東和)

畠山 濁水

手繰り寄す姥捨山の通草の実

(如月会)

上野 節子

特選

四歳児五時間歩き夏の山

(如月会)

松田 萌

秀逸

新顔の案山子青空まぶしがる

(花城文芸)

清水 嘉信

優勝旗掲ぐみちのく大夕焼

(あしたば)

高橋 静

間引菜を炒め一人の夕餉とす

平沢 裕子

佐々木みき子 選

特選

敬老日卓球ラケット風を切り

(東和) 多田ゆう湖

入選

流星に託す夫への便りかな

(東和) 熊谷 敏子

新顔の案山子青空まぶしがる

(花城文芸) 清水 嘉信

優勝旗掲ぐみちのく大夕焼

(あしたば) 高橋 静

クリオネは天使のくらげ夢多し

(東和) 菊池 久代

篝火爆ぜぢやぢやもこぢやんと鹿踊

(新樹の会) 千葉 任子

秀逸

荒れ果てし紫竹しちくの庭に客見えし

(東和) 小原 貫之

耳澄ます平和であれとちちろ鳴く

(新樹の会) 後藤 冴子

ともに天戴かぬ国秋澄めど

(如月会) 大畑 善昭

法堂の守護神然と鬼やんま

(あしたば) 蛭沢 秀一

自転車のベルでさよなら秋の暮

(如月会) 高橋 和枝

百年の松に倣ひて松手入

(東和) 畠山 濁水

ただいまの応えはちりん秋風鈴

(東和) 武田 稲子

雨止んで土の温もり蚯蚓鳴く

(あしたば) 佐々木友子

畠山濁水選

特選

秋彼岸父祖伝来の茶渋かな

(東和)

多田ゆう湖

入選

木偶工房木屑濃き香や小鳥くる

(新樹の念)

千葉 任子

胡四王山の囃子聴き入る案山子かな

(新樹の念)

千葉 任子

児のねらふ爺の帽子の赤とんぼ

(如月会)

市川 和子

小鳥くる木立に小さき千恵子の井

(花城文芸)

安部 克詠

一雨にみなぎる生氣草の花

(あしたば)

栗城 静子

秀逸

新顔の案山子青空まぶしがる

(花城文芸)

清水 嘉信

面売りの額に面つけ夜店の灯

(あしたば)

栗城 静子

間引菜を炒め一人の夕餉とす

平沢 裕子

鳥渡る戦渦はいまだ収まらず

(あしたば)

佐々木みき子

鳳仙花嬰の産着のすぐ乾く

(如月会)

上野 節子

邯鄲やとうとう来たる旅の果

(東和)

武田 稲子

雨止んで土の温もり蚯蚓鳴く

(あしたば)

佐々木友子

稲架掛けて早池峰山を隠しけり

(如月会)

上野 節子

安部克詠 選

入選

面売りの額に面つけ夜店の灯

(あしたば) 栗城 静子

稲架掛けて早池峰山を隠しけり

(如月会) 上野 節子

四歳が正座で聞きし終戦日

(新樹の会) 久保田テイ子

木偶工房木屑濃き香や小鳥くる

(新樹の会) 千葉 任子

町へ行くバスはまだ来ず鱗雲

平沢 裕子

どこからか魔女のやうなる黒揚羽

(新樹の会) 豊山れい子

葛つるに手も足も出ぬでくのぼう

(東和) 熊谷 敏子

花の香を残して散りぬ桐一葉

(東和) 小原 貫之

経の声漏るる朝あしたの路地涼し

(あしたば) 高橋 静

一雨にみなぎる生氣草の花

(あしたば) 栗城 静子

特選

秋茄子や曲がりくねりの母の指

(東和) 熊谷 敏子

秀逸

新涼や草を巻きとる牛の舌

(如月会) 高橋 和枝

水音も風も軽やか稲の国

(新樹の会) 菅原砂登子

優勝旗掲ぐみちのく大夕焼

(あしたば) 高橋 静

令和四年度花巻市民芸術祭第十六回文芸大会

「川柳」 作品募集の部 入選作品

佳作

出会い系サイトで詐欺に会いけり

英 阿音子

還歴に一期一会の酒の席

村松あゆみ

宿題「出会い」

塩釜アツシ

選

再会の涙で書いた希望の字

及川洋一郎

特選

盆三日鳴きに出たのか蟬の穴

小田島花浪

山頂で出会った水に慈悲の貌

小田 治朗

化石出て歴史は郷を掘り返す

宮野 裕

秀逸

出会い系まずその前に職探し

蛭沢 秀一

声を聞く互いに後期高齢者

佐々木フミ子

赤ちようちん出合いの一杯奢り合う

千田悠太郎

保護犬と出会い目と目が離れない

英 阿音子

天国で会いたい人がまた一人

及川洋一郎

晩節に潤いくれる五・七・五

藤川 忠巳

終活期しみじみ浸る良き出合い

佐藤 陽子

アンコールひ孫二人目出会えたよ

永井 成子

宿題「紙」 及川 洋一郎 選

特選

約束の紙一枚が永遠の愛 戸来 明子

秀逸

自分史を綴ればつもる悔いの山 小田 治朗

読み聞かせ記憶に残る母の声 あべ 和香

手で漉いた和紙になじまぬわたしの字 宮野 清子

佳作

置き薬紙風船の芳き香^よ 照井 地蔵

紙切りのハサミがタクト客揺れる 蛭沢 秀一

活躍のマスクケースは包装紙 高橋えり子

絶やすまじ世界に誇る和紙の技 藤川 忠巳

まっさらな紙に向かえば無になれる 藤川 忠巳

仲違い口では言えず紙頼み 戸来 明子

お祭が済めば御幣もただの紙 里見 高則

割り印をした紙切れに縛られる 小田島花浪

ゆっくりと紙面広げて今を読む 畠 美香

紙一枚繋がる縁と切れる縁 村松あゆみ

宿題「広がる」

宮野裕 選

特選

ミニ菜園夢の広がる種を播く

小田 治朗

秀逸

広がった記憶の波に酔う日記

照井 地蔵

農民の汗が黄金に変わる秋

藤川 忠巳

ため息の波紋広がるこの地球

高橋みか子

佳作

アルバムを広げふる里なつかしむ

佐々木勝子

可能性信じ広げる夢プラン

高橋えり子

人の輪のゆらり広がり今がある

あべ 和香

三年の思い広がる里帰り

小田 治朗

核の無い世界をつくる輪を広げ

中村 眞子

夢捨てぬ未来広げる虫の声

山口 耕作

山裾に広がる紅葉秋深し

清水 嘉信

町づくり夢が広がる若い声

畠 美香

集落は尾鰭をつけて嫁を待ち

小田島花浪

秋祭り笑顔広がる三年振り

丹野ウメ子

宿題「自由吟」

あべ 和香 選

特選

花の咲く順は問うまいいずれ咲く

及川洋一郎

秀逸

善人の貌になるまで湯に浸かる

小田 治朗

許し合うことが平和の第一歩

英 阿音子

正直を映す鏡がにくめない

鎌田 功

佳作

てのひらに風のやさしさ抱き寄せる

佐々木勝子

何もかも値上げラッシュで家計泣く

高橋 範生

思い出はカラーリボンでラッピング

高橋えり子

想定外なんと素敵な隠れ蓑みの

宮野 裕

職退いて小さくなった夫の手

宮野 清子

大根飯今は特選無洗米

佐藤フミ子

積年の忍耐はじけ秋祭り

永井 成子

錆びたとも知らず持ち歩くプライド

小田 治朗

丸みおび垂れた頭こぶの母の背な

村松あゆみ

張り合いを追い求めては走りぬく

高橋みか子

令和四年度花巻市民芸術祭第十六回文芸大会

「詩」 入選作品

照井 良平 選
牛崎 敏哉 選

芸術祭賞

ぼうけんしや

齋藤 未琴

白紙の地図に

書き込んでいた

ぼくだけの道を

自由に きれいな色で

おたからの場所も決めた

こわい 期待 幸せ と

羽のように軽いかばんを背負って

ちいさい歩幅で歩きはじめた

もっと遠くへ

いけるだろうか

もっと高みを目指して

いいんだろうか

早く大人というものになってみたい

旅の途中で

落としたみたいだ

私だけの宝の地図

それは確かに 胸にあった

絡まりそうなほどの線で

三色で濁りのない色

書き足すこともできないだろう

探すのは もうやめた

また 新しい地図を作ればいい

歩幅が大きくなるほどに

背負うかばんは重くなる

いきたかったのに

もっと遠く

戻ることはできないけれど

足跡が大きくなっても

濃い色でかきなおしたはずの

道が色褪せても

過去を目指したお宝は

結局見つけられずに

足をとめたんだ

どうせいつか終わるのならば

粉々に 切り刻んでしまっても

優秀賞

たぶん どうでもいいんだろう
でも どうせ
歩いてきた足跡が消えないのなら
たぶん これが私の宝物になるんだ

春

河津 詠太郎

春 なのだ

あの積み重なった雪が
あたかも
魔法のように消え
岩手山には
鷺が翼を広げ
山の端には田植桜が咲く
人影のなかった私の郷も
おちこちに
黒い影が動き始め
たくましく
耕耘機が土を砕く

水口にせめぎ合う水
小鳥たちは
白楊の梢を争い
轉りを競って
研は優しく地上を渡る

水はやがて地上を覆い
空を沈めて

山々は逆しまにその空に添う
田植機は

ぼんぼんと水面を駆け
後ろにはまっすぐな

幾条もの早苗を生みつける

雪解けの後の

あの錆色に汚れた私の郷は
いま

見渡すかぎり

緑の透き通った水を湛え
作りたてのように新しく

晴れ着を纏った

少女のように初々しい

春なのだ

コスモスと母と私

朝倉 了子

好きな花は？と聞かれたらコスモスと答える
いつからか

なぜ好きなかは分からないが

亡き母との思い出の一つに

コスモスの花がある

小学生の頃

姉妹ケンカだったのか

かくれんぼだったのかは忘れたが

とにかく母から逃れるために

背丈ほどのコスモスの花の後ろに隠れた

その時 コスモスの花粉が服に付いて

後で叱られた事は覚えていて

思えばコスモスは隠れるには隙間だらけ

気づかない振りをした母の心

今なら分かる

歌手の山口百恵の「秋桜」の歌は好きだが

私の中にあるのはカタカナのコスモス

母との思い出はカタカナのコスモス

漢字の「秋桜」を知らない時代だったからか

自分でも分かってないが

カタカナのコスモスと

幼い私を見て佇んでいた母は消せない

コスモスと母はいつも重なる

—コスモス—

これは譲れない私の想い

毎年増えるコスモスを

庭の石の後ろから覗くように

池の水に影を映すように

場所を楽しみながら植えている

だが—

最近茎が木の様になるので

咲いた後は手に余る

片づけるにも重労働の年になった

それでも

今年も見事に咲いたコスモスを

「母と幼い私」が見ている

意味のある・・・

有原 すみれ

どれだけの命を奪ったら
 どれだけの建物を壊したら
 どれだけの自然を破壊したら
 今まで築きあげたものが
 ミサイルという人間が造った凶器は
 いとも簡単に ほんの数秒で破壊

かつてそこには家族が集い
 笑いがあり明るい窓があった
 食卓を囲む何気ない日常があった
 そんな日常を非情に奪ってしまう

失われた多くのいのち
 廃墟と化したガレキの山
 かつて緑だった農地は跡形もない
 豊饒なみどりの平野は何処へ
 家族の笑顔はどこへ

親も住む家も奪われた幼い子の
 流している涙を見たことがありますか
 妻を夫を兄弟を奪われた人々の

流している涙を見たことがありますか

もしこの世に神がいるのなら
 神はアナタを許さない
 意味のある戦争なんて有るもんか
 プロパガンダ ジェノサイド
 ヒューマンエラーが連鎖する

槐の木と幻想

伊藤 諒子

道の先の小さな草原に
 一本の木が立っている
 針槐の木だ
 草地に続く土手を下ると
 湧水を湛えた大きな池がある
 移る空や雲を漣が揺らす
 白鷺が池の魚を狙って舞い降りて
 周りをツンツンと歩いたりする

草地は子供たちの遊び場だった
 近所に住む女の子三人

ガラス細工のような声でさざめきながら
クローバーの花を摘み おままごと
笑ったり 歌ったり 愛らしく
同じ年で背丈も似てて とても仲良し
槐の木の下でよく遊んでいた
・・・のは三十年以上も前の日々

昨年 の秋

三人娘の一人が不帰の旅立ちをした
私の友人の愛娘だった
三人のうちの一人は私の娘

三人 それぞれ健やかに育っていくと
そして 家庭を持って子供を育て
どんなアクシデントも苦勞も
きつと 乗り越えて生きていくと
少女たちもその親たちも願って信じていた筈
だのに
七十歳半ばの父母にも 自身の子供らにも
別れを告げずに
あつという間に
旅立って行ったという

その時から
白いワンピース姿の少女が

足をブラブラさせながら
草地の槐の木の枝に
腰かけているのを
何度も見た

多くを語らない友人
写真に花を供え好物を供えているという
かける言葉は一つも無い
彼方へ行ってしまった娘とともに悼むばかり
「仕方のないことだもの」と友人が呟く
だとして だとして
きりきりと痛む胸の中でその言葉を反芻する

秋は今年も巡りきた
枝に坐って微笑んでいた少女の姿を
この頃 見ることが無くなった
群青色に空が深む夜
針槐の梢に白じろと
一つの星が まるで笑顔のように
輝いているのに気づく

夕照

英 阿音子

猫じゃらし手に
たそがれの道をゆく

日輪が沈んでゆく
地上の災禍を

憐れむように
愚かな人間を
戒めるように

静かにその輝きを消してゆく
ほんのり色付き始めた稲穂に
さよならを言いながら
遠くの山並に沈んでゆく

戦なき空に昇りたいと
つぶやきながら沈んでゆく
天空から見ていると
地球が壊われそうで
つらく悲しいと

あまたの星々も
うなづくように瞬いた

賢治星も

地球が早く
イーハトーブの星になるよう
祈るように輝いている
遠くからアンドロメダも……

銀河鉄道の一両目から
ジョバンニとカムパネルラが
手を大きく振って
エールを送ってくれた

夕照に包まれた
森羅万象
あしたが来ることを信じ
深い闇に包まれてゆく

令和四年度花巻市民芸術祭第十六回文芸大会

「随筆」 入選作品

野中 康行 選

山口トヨ子 選

芸術祭賞

哀感の免許返納

英 阿音子

とうとうカウントダウンが始まった。返納まで一ヶ月。夫の免許である。私は無免許だから、返納してしまうと身動きが取れない。九十才を迎える夫自身が決心。家族の無理矢理の説得で返納した結果、気持ちが不安定になってしまったという話をよく聞く。本人が潔く決心してくれたのだから、一安心だけとかえって私の方が未練がましくなってしまう。

夫の運転歴は長く、思い出は尽きない。若い頃、しばらく東京でハイヤーの運転手をしていた。一番の思い出は美智子さまの父上を自邸まで送迎したこと。朝、迎えに行くと必ず美智子さまが玄関口に出て来て、父上を見送ったとのこと、美しい娘さんだと思っただけで、その後ご成婚なさるとは驚いたと話してくれた。

返納を決めて半年間は、思い出作りのドライブ、遠出は無理なので、近郊の神社めぐり記念館、道の駅を巡った。コロナ以前はご当地の名物料理を楽しんだが、それも出来なくなって、食いしん坊の私にはつらい。仕方なく特産品を買い求め我が家で料理というのが

すっかり定番になってしまった。

返納が他人事と思っていた頃、震災直後、三ヶ月程経ってから沿岸の様子を見に行ってしまった。不謹慎なことだが映像より実情をこの目で見たいという思いにかられ出かけてしまった。道路の瓦礫はだいたい片付けられていたが、津波の跡がなまなましく残っていた。見学なんて申し訳ないことをしてしまったが、その罰というかタイヤにクギが刺さり整備工場に行く羽目になってしまった。

返納して一ヶ月、寂しげな車庫を見る度、これでいっのだ。事故の心配がないだけいっではないかと納得させている。慣れるほかない、いつまでも車を懐かしんでも仕方のないこと。当の本人は私と比べあつさりしたもの、未練がましいことは一切言わない。私にとつては最大の救いである。

優秀賞

沈丁花の咲くころ

熊谷 敏子

三十年ほど前、仕事で釜石に行くことが度々あった。ある春の日、大町の市営駐車場に車を止めて職場に向かう途中で、良い香りが私の足を止めた。

顔を上げると、住宅の塀越しにこんもりとした沈丁花が盛んに花を咲かせているのが見えた。三大香木の沈丁花、クチナシや金木犀の中でも一番香りの届く範囲が広く、甘い香りで香水やアロマオイ

ルにも使われている。

別名を「千里香」とも呼ばれているらしい。

気持が安らぐ大好きな花である。いつか庭に植えてみたいと思っていた。

震災の前の年に定年を迎え、ホームセンターを散策中に二十センチぐらいの沈丁花が目についた。桃色と白色を一本づつ買い、庭の日当たりが良い場所に植えた。三年目には倍以上に伸び、小ぶりの花房の香りに癒された。なぜか二本とも桃色の花だった。

その後、寒波の強い年に突然枯れてしまった。慌てて育成方法を調べてみたら、時すでに遅し、沈丁花は耐寒性があまり強くなく、西日が嫌いで半日陰を好むと知った。

幸いにも、以前に強風で折れた枝が、挿し木で根付いていた。軒下の鉢で三十センチほどになり可愛いぼんぼりのような花を咲かせるようになった。満開のとき、風に漂う香りに酔いしれる時間が最高に嬉しい。

あの時、釜石で見た沈丁花は、震災でどこまで流されてしまったのだろう。駅裏の川を越え、小佐野の平地辺りにでも根付いていることを願わずには居られない。

こんもりと咲き誇っていた様子が、今でも脳裏に焼き付いている。沈丁花の咲くころに目を閉じると、香りに足を止められて、うっとりしていた若い自分がいる。

鉢植えの沈丁花は、夏は日除けをし、冬には囲いをして守っている。今度こそは長く花を咲かせたい。暫くは地植えをせず、玄関先に置いて香りを楽しみたいと思っている。

奨励賞

仕舞い夕顔

藤井 茂

たそがれ時、夕顔の白い花に夕焼けが映え、夜は夜で月の光を受けて冴えた。なかなかの風情に夫と見入った。

数年前から夕顔の棚づくりをやめた。家の前の草を刈り集め、堆肥化した小山に植えっぱなしの地這い栽培とした。

摘心・整枝・追肥なしで無農薬だ。これが当たり前でとにかく白い花が沢山咲いた。全て実になったら大収穫だと目を瞞ったが、雌雄同株、受粉はハチ任せで全て花が結実した訳でない。生りははじめ掌にのる程の夕顔が、いつの間にか巨大化してゴロゴロ沢山寝そべった。誰か貰い手はないかと今年も奔走した。

花言葉は「儂い恋・夜の思い出・魅惑の人」とある。源氏物語に登場する夕顔の君は、光源氏の愛を受けたが、嫉妬と化した女の物の怪に憑かれ儂く散ってしまう。君の家の軒に咲いていた白露の光をそえた夕顔の花は、可憐で艶やかだった。我家の令和の夕顔も透き通った花弁にレース状の脈が入り、清楚この上ない。夕顔の君のように、艶やかな花を咲かせ、翌朝日が高くなると儂く萎んでしまう。

花も実もある人生とは良く言うが、夕顔程見た目の落差が激しいものはない。花とは似ても似つかぬ、ドテーンとした実に成長する。岩手の沿岸地方ではお盆の供え物にすると聞き、盆は過ぎたが真似して飾った。薄緑色の夕顔の存在は、俄に仏前を明るく楽しい

場所にさせた。

旬の家庭菜膳に名を連ねる夕顔だが、効能は、火照った身体をしずめるとある。今夏は「夕顔の翡翠煮葛掛け」が人気だった。温・冷どちらもとろりとした食感で喉越しが良い。昔からの我家の定番「夕顔と鯖節の味噌炒め」はついに定番待ちとなった。

朝晩が涼しくなった。秋の気配が色濃くなったら、次々と秋の味覚が食卓を賑すだろう。その前にコオロギの音を聴きながら「仕舞い夕顔」料理で夏の名残を惜しむとしよう。

佳作

長男Mに見守られ生きる

郡司 彬子

夫が急逝してから約40年、10歳だった長男が、今年8月の誕生日に50歳になった。夫、義母、義父と亡くなり、墓参のたびに謝っている。いまだに長男は結婚できないでいる。義父は死ぬ間際まで「Mにはいい人いないのか？」と心配していた。「他人が入らない方が住みいいよ」という友もいたが、可愛いお嫁さん、頭がくりくりとした男の子の孫がいたら、私の人生も変わっていたかなと思う。

小学3、4年のころ長男が登校する前に、私に聞いて欲しいことがあるという。「ちよっと今忙がしいから」と話をさえ切って、会社に行く準備をしていた。「いい聞いてくれなくても、バツちゃん

なら聞いてくれる」。と言われ、「バツちゃんなら」のひと言が胸にひびいた。心配しながら会社から戻ってくると普通にしていたので心底ホッとした。あれから何10年もたち、今度は会社の悩み、上司同僚の話聞いてやっっている。聞くだけでもいいらしい。私も現役のころ同僚とぶつかりあわやというときがあった。私は日記に書きうさを晴らしていた。

令和4年、私は80歳になった。令和2年2月薄氷の道路で転倒して腰をしたたかに打った。それから何度も転び、丈夫な体を取り得だった私も、筋肉がなくなり力もなくなってきた。洗濯物を2階の干し場まで運べなくなった。気が付いたMがヒョイと運んでくれる。ゴミ出しも積極的だ。今度は草とりを引き受けてくれるという。「何10年もやってきたんだからまかせて」と胸を叩く。私の出番は朝晩の食事作りしかないと思う。昼御飯は大根の味噌漬けを入れたお握り、小さな弁当箱に彩りよくおかずをつめる。「大変だべ」とMは気付かせてくれる。これが実に楽しい。

私のやれることは頑張ろうと思うと、自分自身に気合いを入れた。草とり用具には気を使い、色々買っていたが、8月のある日「いい鎌を見付けてきた」とMはやる気満々だ。

ほほえみの団らん

花巻南高等学校 多田 帆香

中学生二年の夏、いとこたちと予定が合い、遠野市に住む母方の祖母の家でバーベキューすることになった。八人そろってバーベキューをすることは初めてだったので、私は楽しみで仕方なかった。当日になり、肉屋で肉やたれを買い、祖母の家に向かった。いとこたちはもう着いているらしく、車で急いで向かった。道中では家族と「たれは中辛でよかったか」など、他愛もない話をした。

到着後、屋根がある倉庫でバーベキューをすることになった。本格的なバーベキューで私は胸が躍っていた。

父が木炭に火をつけると、私は手の痛みも忘れて団扇を仰ぎ続けた。煙が鼻に入ってむせたのを、父に笑われて少しむっとした。団扇の風が強すぎて、火を消してしまったのは自分でもほほえましい思い出だ。

隣で母は祖母と語り合っていた。何を話しているか気になったが、私はお肉が食べたい一心で混ざらなかつた。

お肉を焼き始めると、辺りにいい匂いが漂い始めた。皆とお肉を幸せそうに食べる祖母を見て、幸せな気持ちになった。

食後に散歩がてら祖母と猿ヶ石川に出かけた。川は涼しく空気が透き通っていた。

「学校はなんじよした？」

「最近、学校でやつとエアコンの設置が終わったよ。」

「んじや。なんぼか涼しくなるな。」

「うん。おばあちゃんも熱中症には気を付けてね。」

「んなの当たり前だよ。」

なんてことない日常生活のことを歩きながら祖母と語り合った。祖母の家に集まったことは、いまでもひと夏の思い出として私の記憶の棚にしまっている。コロナが終わり、また高校生になった私が皆と団らんできたらと願っている。

同窓会でフラダンス

清水 意久子

高校の同級生で理事のKさんから「7月3日の同窓会は余興の当番なので、一緒にフラダンスしましょう」と連絡があった。「エッ私がフラダンスを」と一瞬引いたが、新し物好きなので二つ返事でひき受けた。市内の同級生に限定で声をかけたそうだが、コロナ禍で集まったのは4人だった。

大きな鏡のあるKさんの家に集合し、当日まで3回の練習スケジュールを立てた。先生は卒業以来会うT子さん。フラダンスとの出合いは、腰痛を治したため、独学で始めて20年になるという。その姿勢は、学生のころから変わっていなかった。

3分ほどのハワイアンに合わせて、Tさんがしなやかに踊る姿に、うっとり眺めていた。「簡単な振り付けだから」と真似して踊ろうにも、私たち高齢者は頭と身体がバラバラなのだ。動画を撮って各自で練習し、日々何とか形になってきた。

練習後のランチ会は、楽しいひとときだった。3人の卒業後の道のりを聞いて、私は何をしてきたのだろうと情けなくなった。

子育てが一段落した33歳のころ、夫に働きたい意向を話すと「家庭を優先にし、家事に差し支えない時間帯なら良い」の返答だった。20年ほどパートで働いたが、何も残っているモノはない。想定外の寂しい老後だけだ。

Kさんに胸のうちを話すと「そんなことないでしょう。3人の子どもを育てて、旦那さんや両親のお世話もして見送ったのだから」と慰められた。彼女は長い間福祉の仕事に就いて、自分で家を建てた。尊敬する友人だ。

同級生との実りある交流から数日後、真夏日の花巻温泉ホテルでは、3年ぶりの同窓会が開催された。例年なら300人が一堂に会するのだが、今年は約半数と聞いている。70歳超えの「コッキーズ」に急ぎよ1人加わり、色彩豊かなドレス効果と練習の成果で、会場内は「ブラボー」の聲が飛び交った。

